

『穴の前で』

「ここしばらく、『現に』の話をしているけれど」

「そうだったね」

「その『現に』というのは、何の説明にもなっていないような」

「何かを証明したいわけではないからね」

「何も解明しないの？」

「論証したいわけでもない」

「相手を説得できないんじゃない？」

「説得しようと思っていないよ」

「では、どうしたいの？」

「すべてを、そのままにしておきたい」

「それなら、長々と言わなければいいんじゃない？」

「ごもつとも」

「認めちゃったよ」

「ついつい、言いたくなって、考えたくなるもので」

「どうして？」

「きっと、目の前にあるものを受け入れるための儀式なんだね」

「儀式が必要なものなの？」

「普段は、気がつかないからね」

「気づいたとして、どうにかなるもの？」

「どうなるわけでもない」

「儀式までしたのに？」

「そのままにしておくわけだから」

「何もしないんだ」

「ただ、それをそれとして、認めるだけ」

「それに、意味、ある？」

「ないといえば、ない」

「あるといえば、ある？」

「あえて言うなら、認識こそ力なり、ということかな」

「何だか、難しい言い方だね」

「そういう言い方もできる、ということで」

「でも、認識しても、どうにもならないんだよね？」

「どうにもならない、ということが、わかるわけだ」

「だから、それが何になるわけ？」

「運命論という考え方が、あってね」

「あれ、話、変わった？」

「聞いたこと、ある？」

「『起こることは、すべて、あらかじめ決まっている』という考え方のこと？」

「普通の運命論では、そうだね」

「普通の？」

「いわゆる運命論、弱い運命論、と言ってもいい」

「ということは、強い運命論も、あるの？」

「起こることは、すべて、現に起こる」  
「お、きたね」  
「慣れてきた？」  
「そろそろね」  
「あらかじめ、決まっているわけではない」  
「え、どういうこと？」  
「たとえば」  
「たとえなくても、いいけど」  
「何か、神さまのようなものが、世界の背後にいて」  
「超越的な神さま、だったよね」  
「すべてを見通したり」  
「監督したり、裁いたり」  
「などということは、ない」  
「また、『現に』の話だね」  
「その神さますら現れさせるような、力のようなもの」  
「ようなもの？」  
「力というか、動きというか」  
「ぼんやりしてきたね」  
「はっきりとは、わからないもので」  
「一言でいうと？」  
「あるようにある」  
「本当に、そうなのかな？」  
「さあ」  
「また、そんな」  
「あくまで、仮説です」  
「説明は、しないんじゃないかった？」  
「とりあえず、こうかな、というところで」  
「あとで、その仮説を変えることもあるの？」  
「もちろん」  
「どういう基準で？」  
「サイズの合っていない服を着ている時のような、息苦しさを感じた時かな」  
「また、たとえが出てきたね」  
「潔く」  
「変える？」  
「捨て去る」  
「そうやって、進んでいくんだ」  
「じっくり、ゆっくり」  
「最終的に、どうなるの？」  
「今、ここにいることを確認する」  
「やっぱり、それだけ？」  
「たった、それだけ」  
「それだけのために、今、こうして対話をしているの？」  
「それが、哲学というものだよ」  
「そうなんだ」  
「すばらしいでしょ？」  
「えっと、どこが？」